

# 学際から循環器学の ブレイクスルーを産む “Cardio-X-ology”

企画：田村雄一

(国際医療福祉大学医学部 教授)

循環器病学の黎明期は聴診や心電図などの診断学が中心であった。その後、カテーテルインターベンションやEBMなどによる治療学が隆盛を極め、心エコーやMRIなどの画像所見と相まって現在の専門分野としての循環器学のイメージが定着している。しかし現在、これまでの強固なEBMを覆すような強力な新薬の数は減少しており、またゲームチェンジャーとなるようなデバイスの数も減少している。この10-15年間のあいだ循環器学の発展に若干の閉塞感を感じている専門家も少なくないのではないだろうか。

翻ってがん治療など他の分野を見てみると、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬などの新しい機序の薬剤が登場し、循環器学がパラダイムシフトを起こすことができない間に、エビデンス構築のレベルでも先んじている領域も多い。

今後体系化すべき循環器学の知識の対象を考えたときに、一つのヒントとなるのはこれまであまり関連が強くないと考えられていた領域・分野との連携である。Cardio-oncologyのように、他分野と連携する中で循環器学の新たなフロンティアやブレイクスルーのヒントが隠れている可能性はないだろうか。

他分野で積み重ねられた知見、例えば免疫学や腫瘍学の知見が、循環器疾患とも関連し、他の治療薬であったものが心不全や動脈硬化に応用できる例が、近年増加している。そこで本特集ではCardio-X-ologyとタイトルをつけ、各領域との融合的な知見を取りまとめることとした。Cardio-Rheumatologyでは線維性病変である強皮症と循環器疾患との関連を、Cardio-Immunologyでは研究の発展が著しい自然免疫分野と動脈硬化や心不全との関連を、Cardio-Hematologyでは単クローン性増殖疾患と循環器疾患との関係性を、さらにCardio-Hepatologyでは門脈圧亢進症に伴う循環障害にスポットを当てて、多分野融合的でかつ循環器学の次のステップへのヒントになるような論文を記載いただいている。

願うなら本特集を目にした読者が、自分なりのCardio-X-ologyを発見して、学際領域からの循環器学のブレイクスルーをもたらしてくれることを願う次第である。



## HEART's Selection